子どもと保育を思う日々から

無藤 隆（白梅学園大学名誉教授）

日々、思索を巡らす無藤先生は、普段、子どもや保育をどのように見て、感じているのでしょうか。読むと、新たな視点が身に付きます！

幼児は日々似たことをしていても、新鮮である

幼児が散歩に出て、公園に行って、また毎日園に来て、そのたびごとにまるではじめてのように新鮮にそこでの活動を楽しみます。それがほぼ常のことです。大人が職場に行くみたいに、しんどいとか、いつも同じみたいな顔をしていません。少なくともよく寝て食べていればです。

毎日同じような遊びをしていても、特に園にいると、飽きたりしない。それは、忘れやすいからでもあるのでしょうが、それ以上に、実際に新しい試みをいつもするからでしょう。たぶんそうしようと意図しているというより、気まぐれに、たまたま同じ積み木、同じ砂場でも、ちょっと異なるかかわり方をするからでしょう。昨日までのことを思い出して、もっと「すごく」しようと思うかもしれません。ほかの子どもの刺激もたくさんあります。

身近な環境で活動する。その際に、その都度、新鮮な出合いがあり、変わった展開が起こり、そして、新たな試みをする。同じことをくり返しながらも、何回かでそれを変えていく。そこにたいして意味がなくても、そうする。それが遊びの気まぐれさだからです。思いつきでやることが好きで楽しいからです。それはまるで、命のエネルギーがあふれてくるようです。周りへと注意を向けて、いつもおもしろいことを探しているからなのでしょう。そこから子どもは、物事の可能性がいくつも様々にあることを見つけていきます。それが役立つかどうかは関係なく、将来有効にするためとも思わず、ただ、新鮮な出合いがあり、そこでおもしろい、不思議なことを見つけたいからなのです。そして実際、そこは幼児が正しいのでしょう。この世界は新鮮な輝きがあり、たくさんの未知の可能性に満ちているのです。

イラスト　イイノスズ

無藤 隆（むとう たかし）
白梅学園大学名誉教授。白梅学園大学大学院で指導を行うかたわら、保育者、保育研究者向けの講習会、勉強会にて講演を行う。
『保育ナビ』編集委員会座長。